

魔王^{さま}
the brave is lucifer
異世界^で
勇者^{となる}

羽
沢
向
一
表紙
紙
挿絵
り
爛
汰
よう
朗
@
涼

立ち読み版

CONTENTS

プロローグ	魔王を倒せ！	007
第 I 章	俺 <small>まおう</small> が勇者 <small>まおう</small> だ	016
第 II 章	勇者 <small>まおう</small> に女王の処女を捧げる	038
第 III 章	勇者 <small>まおう</small> が女王のミルクを搾る	102
第 IV 章	勇者 <small>まおう</small> VS 魔王	160
第 V 章	女王に超次元の快樂を種付けする	208
エピローグ	女王たちの淫らな宴	250

ギオの右手が、アリサの肩をつかんだ。

「また、話が長くなりそうだな」

小さな人形を持ち上げるようにアリサの身体が浮き上がり、鞍も手綱もない裸馬の背に白いドレスの尻を横座りで乗せられる。すぐ前に馬の太い首があり、メラメラとたなびく溶岩のたてがみがアリサの胴体に触れた。

「ひいっ！」

自分の身体が燃えるイメージに襲われて、アリサは悲鳴を放つ。だが赤熱して見える姿に反して、実際には高温ではなかった。それどころか尻を乗せている馬の背からは、体温が感じられず、着衣の何枚もの布越しにひんやりとした冷気を感じる。

シェイラがあわてて両手を伸ばし、アリサの脚にしがみつこうとした。

「アリサになにをされるおつもりですか！ えっ！」

ギオが右手をひと振りすると、シェイラの足もとから黒い縄のようなものが何本も立ち上がる。黒い縄は獲物を締め殺そうとする蛇のごとく、瞬時にドレスの上から女公爵の胸に巻きつき、乳房を根もとからくびり出した。美熟女の豊満な乳房がさらに前に押し出されて、ドレスの布を突き破りそうに強調されてしまう。

両腕も背後に縛られ、口にも黒い縄ががっちりとはさまされた。

「んーっ！ んぐん——ううっ！」

「さっき言っただろう。女王陛下に、俺の実力を見せてやるってな。その間、おまえはそこでじっとしている。後でたっぷりかわいがってやる」

「ギオ様、叔母上を解放してください」

アリサの言葉が終わる前に、ギオは軽々と宙を舞い、黒馬の背のアリサの後ろの位置にまたがった。すぐさまブーツで、黒馬のたくましい胴体をたたく。

黒馬が高々といなき、黒い蹄が塔の屋根を蹴った。爆音が鳴り、堅固な石にひびが入る。身動きならないシェイラの足もとにまでひびが走り、猿ぐつわを噛まされた口からくぐもった悲鳴があふれる。

ギオとアリサを乗せた黒馬の巨体が跳びあがり、塔の上から夜空へ舞った。

アリサは目を見開き、両手でギオの身体に抱きつく。

ギオもニヤニヤと笑い、自分の胸に密着するアリサを抱く。

「きゃあああ——っ！」

黒馬は大きな放物線を描いて、闇の中を落下していった。王都エステアの空に、都の主たる女王のかすれた長い悲鳴が響く。

頭上から近づいてくる叫びを耳にして、街並みを警固する兵士たちが顔を上げた。その目の前で、黒馬が一軒の民家の屋根に墜落する。轟音をあげて石葺き屋根が崩落し、屋根を蹴った黒馬が再び飛翔した。

兵士の目と脳が自分たちの国王ともうひとりの男を認識する前に、ギオとアリサの姿はエステアをかこむ城壁へ向かって飛んでいた。後には、敵の攻撃かとうろたえる兵士と住民が残される。

民家の屋根を蹄で蹴り壊した黒馬は、再び夜空を翔けて、城壁に降り立った。見張り番の兵士のひとりを突き倒して、城壁の外へと跳ぶ。

「女王陛下、敵の陣地に降りるぞ」

「え、あ、は」

ギオの胸に顔を埋めていたアリサは、恐怖に痺れてまともな言葉を返せなかった。それでも顔をわずかに離して、視線を下へ向ける。

息を呑む速度で、暗い地面が迫ってくる。もちろん自分のほうが落下しているのはわかる。このままの勢いで地面に触れたら、衝撃で即死する速さだ。

そしてすぐに、迫ってくるものが地面ではないと知った。眼下の視界を、松明に照らされる人の群れが埋めている。目に入るだけでも、エステアを護る騎士や兵士たちの何倍も的人数だ。

（ギオ様は、キルシユ帝国軍の陣地の中に飛びこもうとしている！ ギオ様も、わたくしも、なぶり殺しにされる！）

胸の内で叫ぶアリサの耳に、ギオの平然とした声が響いた。

「燃やせ！」

それまでずっと閉じられていた黒馬の口が開いた。唇がまくれ上り、剥き出しになった歯列と歯茎も黒い。しかし歯の奥は、赤々と揺れる光に染まっていた。

喉から毒々しい紅蓮の炎が吐き出され、落下する先の兵士の集団へ向けて襲いかかった。闇を貫く一筋の赤い直線が、兵士のひとりの頭にもぶつかる。次の瞬間、炎は爆発的に四方へ広がり、洪水のように周囲の兵士たちを呑みこんでいく。

真紅の爆炎は瞬く間に消失した。直後に、黒馬が衝撃音をたてて着地する。四つの蹄の下で地面が大きく陥没したが、背に乗るアリサにはわずかな揺れしか伝わらない。

「ああ……………」

アリサは目に入る光景に、啞然とするしかなかった。

黒馬の着地点を中心にして、円形に焼死体の群れが折り重なって転がっている。どれも完全に黒い炭と化していて、個々の区別はつかない。幸いにといふべきか、肉が焼ける臭いはなく、あまりに非現実な光景に、アリサは吐き気を催す余裕すらなかった。

焼死の円の外には、まだ数えきれない兵士たちの姿があった。手に武器を構える兵士たちは、平然と自軍の死体を踏みつぶし、蹴り散らして、円陣をせばめてくる。

敵兵の顔が見えるようになって、アリサは悲鳴をほとばしらせた。

死者を踏みこむ兵士たちも、また死者だった。



迫りくるどの兵士の顔にも、意思も感情も浮かんでいない。虚ろな顔は、ある者はミイラのごとくカサカサに乾燥していた。またある者は紫色の皮膚が、パンパンにふくれあがっている。

だが顔がきちんと残っている者は、まだましなほうだ。頭部がざっくりと割れて、灰色の脳が覗く者。片目が失われて、どす黒く変色した血まみれの眼孔がぼっかりと空いている者。下顎が引きちぎれて、喉の穴を見せている者。即死するはずの様々な損壊をさらす哀れな顔が、何列にも並んで、闖入者へ押し寄せてくる。

言葉を失うアリサの背後で、ギオは愉快そうな笑い声を放った。

「なんだよ。どいつもこいつも生き腐れじゃないか。知ってるか、女王陛下。生き腐れというのは、簡単な魔法で動かしてる死体だけ。お手軽で安上がりな軍隊だ」

アリサも兵士たちの報告は聞いていた。キルシュ帝国が殺した敵軍の兵士の死体を魔法で操って、帝国軍の兵士にしているというおぞましい話を。

死者の兵士は、心臓を突き刺しても、首を切り落としても、頭を粉碎しても止まらない。四肢を切断するなどして、行動不能にして、ようやく止められるのだ。

そう告げた騎士たちもまた、死者のごとく疲弊しきった顔だったことを、アリサは覚えていた。

現実には直視するまで、とても信じられなかった。この世界の長い歴史でも、そんな忌ま

わしい戦争をした国など存在しない。未来にも存在するはずがない、と考えていたのだ。しかしアリサは目にしてしまう。

「オーゼン団長！ ラッセム伯！」

死者の軍勢の中に、よく知っている顔を発見した。ともに青白い生気のない顔だが、はつきりと判別できる。早くに両親を失い、十代で王位に就いたアリサを支えてくれた家臣たちだ。

オーゼン第三騎士団長は国境を破られた最初の戦いで、戦死を報告されたが、死体は見つからなかった。ラッセム伯爵は自分の領地を護る戦いで、消息を絶った。

二人の他にも、見知った貴族や騎士の顔がいくつもある。アリサは絶叫していた。

「お願いです、ギオ様！ 彼らに安らぎを与えてくださいっ！」

「言われなくてもやってやるさ。つまらねえ生き腐れのゴミクズは、俺がきれいに焼却処分してやる」

黒馬が同時に、口と左右の赤い眼球から炎を噴出する。三つの炎は扇状に広がって襲いかかり、燃える旋風と化して死者の軍団を次々と巻きこむ。さらに赤い尾も燃え上がり、何本もの炎の槍と化して、歩く死体の群れを次々と貫いた。

悲鳴も叫びもない。炎に触れた兵士は一瞬で燃え上がり、暴れる間もなく燃えつき、黒い炭と化して倒れていく。最初に黒馬が吐いた炎と違い、新たな炎は止まらない。

シェイラはもう一度耐える意志力を持てなかった。溺れる者が差し出された手にすがりつくように、かすれた叫びをほとばしらせる。

「してっ！ わたしの身体を愛撫してっ！」

「それでよし！ 女王陛下が叔母さんのおっぱいを揉んでやれ」

姪と叔母が同時に裏返った声をあげた。

「わたくしが！」

「アリサが！」

二人は互いの顔と裸体を見つめ合い、アリサは理解した。

（叔母上は本当に限界だわ）

シェイラは若いころから、男勝りの女傑として名を馳せていた。王族にふさわしい優れた知力と精神力を備えているだけでなく、身体能力も高い。剣や弓、乗馬もひと通りこなした。実戦を経験したことはなく、筋力は男にはおよばないが、技量を駆使して、新人の騎士相手の試合なら充分に勝てた。

両親を亡くしたアリサにとって目標である強い叔母が、美貌に著しい苦悶をあらわにし、赤く染まった全身を熱病に浮かされてるように痙攣させる。このまま放っておかれたら、叔母は身も心も壊れてしまいうさだ。

「今は、叔母上の苦しみを癒すことが必要です。どうか、わたくしに叔母上の胸に触れる

ことをお許しください」

アリサの申し出を断ることは、追いつめられたシェイラには不可能だった。身体を侵す疼きを解消できるなら、どんな破廉恥な行為でも、どれほど背德的な墮落でも、甘んじて受けられる。

「あああ、アリサ、お願いするわ。わたしの胸に触れて」

「はい、叔母上」

アリサもベッドの上に膝をついて、滑るようにシェイラに近づいた。全裸の身体同士が接近すると、アリサは胸や腹に熱気を感じる。シェイラの身体が蛇の淫毒に侵されて、本当に熱くなっているのか。それとも叔母の肉体から発する凄まじい欲情を、熱さとして受け取っているのか、アリサにはわからない。

アリサは上体を前へ傾け、顔を向かって右側の熱巨乳に寄せる。アリサが持つイメージでは、女の乳房は赤ん坊に母乳を与えるものだ。手で揉むのではなく、口で乳首を啜えるのが正しい姿だと思える。

気品ある唇が、痛々しいほどに勃起した叔母の乳首を挟む。

「あひいっ！」

シェイラの全身がビクンッと震えて、そのまま硬直した。

アリサは上下の唇に当たる乳首の硬さに驚嘆する。

(女の乳首が、こんなにカチカチになるなんて)

動きが止まったシェイラの体内を、姪に啜えられた乳首から発した快感が駆けめぐる。

(あああ、気持ちいい！ アリサに啜えられて、なんて気持ちがいいの！)

ギオの指に弾かれたときの爆発のような快感とは、まったく質が違う。神経を打ちすえる暴力的な快感ではなく、疼きを癒されるやさしい悦びが、全身に染みこむ。

凍った喉がゆるゆると動き、口から熱い吐息があふれた。

「はああああああ……あああ………」

だがすぐに、シェイラはもの足りなくなる。アリサはただおそるおそる唇で片側の乳首を挟んだまま、じっとしているだけだ。もっと刺激が欲しくてたまらなくなる。

「ああ、アリサ、もっと、わたしの乳首を吸って！」

「よろしいのですか」

アリサは唇を離して、叔母にたずねた。その途端に、刺激を失った勃起肉筒が悲鳴をあげる。シェイラは今にも泣きだしそうな顔で、懇願の声を搾り上げた。

「早くっ！ あああ、早く、もっと吸って！」

返事も忘れて、アリサは再び乳首を啜える。さつきよりも肉筒を押さえる力をやや強くすると、勃起の硬度をいっそう鮮明に感じた。シェイラのせっぱつまった声が、鼓膜をたたく。

「啜えているだけではなくて、吸うのよ！ 吸ってちょうだい！」

叫びながらシエイラが不自由な身体を前に突き出し、乳房を姪の顔に押しつける。アリの唇だけでなく、鼻も、頬も、汗に濡れた乳肌に含まれた。

叔母の高い体温にうながされて、アリサは強く息を吸い上げる。途端に乳首だけでなく、やわらかい乳肉が口内に押し入ってきた。

「んむううう！」

予想外のこと驚きながらも、なかば反射的に舌で口内の乳首をつつき、舐めてみる。打てば響くように、叔母の歓喜の叫びが噴き上がった。

「それよっ！ それっ、いい！ はっあああ、舐められるのが気持ちいいわ！」

（叔母上、乳首を舐めてさしあげるのがいいのね）

今度は意識して舌を動かし、乳首全体に這わせる。肉筒の根もとから、乳輪やさらに周囲の乳肉を舐めしやぶる。

「あひつ、ふあああ、たまらないわ！ アリサの舌で蕩けそうだわ！」

姪から与えられるやさしい悦楽は、舌が動きまわるほどにより大きく、さらに深くなっていく。まだいじられていない左の乳房と股間は、あいかわらず苛烈に疼いているが、今は右胸を愛撫される歓喜のほうが上まわり、シエイラの身も心も満たした。

口と鼻を豊乳でふさがれているアリサは、息が苦しくなり、一度顔を離した。

「はあああ」

大きく呼吸をして、再び叔母の胸に顔を寄せる。目の前に、自分の唾液でべとべとになった右の乳首と、まだ濡れていない左の乳首が目に入る。

(かたいっぽうだけ舐めてばかりなのは、かわいそうだわ)

そう思うと、ごく自然に左側の乳首を口に入れていた。強く息を吸い、乳輪の周囲のやわらかい肉を口の中にふくむと、舌を這いまわらせる。

「はっ、あんんんん。気持ちいい！」

今まで放置されていた左胸を舐めしゃぶられて、シエイラの中に新たな喜びが大きくふくれあがる。焦らされつづけた疼きが癒されて、温かい蜂蜜のような快感がねつとりと体内に蓄積していく。

だが同時に、アリサに捨てられた右側の胸が、悲鳴をあげはじめた。一度は鎮まった疼きがより大きく復活して、豊乳全体が再度の刺激を求めて叫ぶ。乳首がより高くそそり勃つて、ふるふるるとわななき、先端から姪の唾液を滴り落とした。

「アリサ！ 右の胸も、あああ、いじって！ 左胸を舐めながら、アリサの手で、右胸もいじるのよっ！」

叔母の叫びを聞いて、アリサははじめて手を使えばいい、と気づかされた。
「んう」

と、ふさがれた口で返事をして、右手をもうひとつの乳房に押し当てる。若い女王の五本の指と手のひらには納まらずに、たつぷりと乳房が外へあふれた。見た目以上のボリュームに、あらためて驚かされてしまう。

(大きい！ 叔母上の胸はこんなに大きいのね！ それに、とてもやわらかいわ！)

アリサの五本の指は、シェイラの乳房に埋まり、うっとりするほど心地よい感触で包まれている。熟した豊乳は、影の縄で根もとを絞られ、淫毒に侵されて張りつめていても、すばらしい柔軟さを保っていた。

姪が叔母の乳房の触り心地に魅せられると同時に、叔母も姪の手によがらされる。

「はっあん！ アリサの手がいいわっ！」

乳房に押しこまれた五本の指の下から、肉がとろとろと溶けていくように思えた。

「しごいて！ 乳首をしごくのよ！」

「んんっ」

またくぐもった声を返して、乳房をつかむ右手を手前に引く。指が肌を滑り、屹立した乳首を握る。粘土をこねるところをイメージして、指でこねまわす。不思議な弾力がくにくいと指に伝わり、アリサはまた感嘆させられた。

「あふっ！」

シェイラはのけぞらせた顔を左右に振りたくり、言葉にならない喜声を噴き上げる。



「はううつ、あつおおおつ！」

悩ましい淫毒が染みこんだ左右の乳首を、同時にしゃぶられてしごかれる快感を表現する言葉は、持ち得なかつた。エスト王国の名高い女公爵は、ただひたすら甘いよがり声を響かせつづける。

(あああ、夫よりも気持ちいいわ！)

どうしても亡夫との夜の行為と比べてしまう。夫にもたつぷりと豊かな胸を愛してもらった。夫も同じように口と手を駆使して、同時に左右の乳首を愛撫するのが好きだった。夫の愛撫を超えるものなどないと思っていた。

しかし魔王の恐るべき魔法の毒に狂わされた肉体は、姪の愛撫を夫よりも気持ちいいと感じている。たまらなく悔しいが、次々と湧き起こる快樂の大波はどうにもできない。

(このまま果ててしまいそう!?)

そう気づいて、驚愕した。夫に愛されたときにも、胸を吸われ、揉まれるのは前戯だった。乳房と乳首の刺激だけで絶頂を迎えたことはなかった。未知の体験のなかで、未知の頂点がやってくる。

自分から求める言葉を叫んでいても、血のつながった姪に果てさせられるという異常な現実に血の引く思いがした。しかし絶頂へ駆ける肉体を止めることは不可能だ。やめて、という言葉を口に出すことすら、押し寄せる悅楽に止められてしまう。

決定的な一撃はなかった。連続するアリサの舌と指の動きが、シェイラに限界を突破させる。

「ほっおおおおおうう！ イクッ！」

王族が口にするには、かなり品位のない言葉だとわかっている。だからこそ夫は、公爵であるシェイラが、イク、と告白することを望んだ。妻も受け入れ、恥ずかしがりながらも喜んで口に出した。王である姪にも、大きな羞恥の言葉を告げずにはいられない。

「イツちゃう！ おお、イクイクうっ！ はっおおおおうう！ アリサにイカされちゃううううっ！！」

シェイラの背中が弓なりにのけぞり、激しく胸を突き出した。

「きゃっ！」

アリサは突き飛ばされて、乳首を離し、背中からベッドに転げた。唇と指が強く乳首をこすり、シェイラの豊乳の絶頂をさらに一段高く押し上げる。

「おおおおう、もっといっくううううっ！！」

女公爵は斜めになった身体を、背後のギオへあずけて、全裸の肉体を震わせた。

「うううううう………」

エクスタシーに浸る叔母の姿は、ベッドから見上げるアリサの目に、あまりにまぶしく映った。後ろにのけぞったシェイラの乳房が、天井を向いてふるふると震えている。

顔を背後へ向けると、一瞬前まで黒い服を着ていたギオが全裸になって、下半身をアリスの尻へ密着させている。

「童貞を脱出したら、今度は女と男の両方を味わおうぜ」

「そ、それは、はううっ！」

気がつくのと、アリスは自分から腰をくねらせている。自分が動くのと、ギオの肉の武器をもっと鮮烈に感じて、悦びが火山の溶岩のように湧き上がってくる。

膣内のギオの男根が乗り移ったかのごとく、アリスの下半身では色白の肉棒が今まで以上に猛り勃ち、肌が赤みを増している。

ギオはアリスを後ろから突きながら、女のひとりと呼ばわった。

「巫女長！ 女王陛下に貰ってもらえ！」

四つん這いのイデイスが、まるでこういう動きに慣れているとばかりに、絨毯の上をすばやく滑るように移動してくる。

「アリス陛下、お情けを頂戴いたします」

膝をつき、頭を深く垂れたイデイスは、独特の銀色の長い髪を縄のように一本に編みこんで、背中に垂らしていた。エスト王国の住民には珍しいきらめく銀髪は、エリソス神殿の代々の巫女長の証し。長い編みこみは、エリソス神殿の巫女たちの伝統の髪型だ。

年齢はまだ十九歳。アリスより年下だが、エスト王国内での地位は国王に並ぶ。互いに

敬意をこめて会話しなくてはならない。

ギオがエリソス神殿を解放したときには、イデイスはエストで最も神聖なご神体の像に全裸で縛りつけられて、女性器に生きた淫具を突っこまれていた。

イデイスは、ミナに似て細くしなやかな体格だが、幼いころより巫女の修行を積んできたので、弱々しさはない。全裸の身体に宿す力強さこそ、神の威厳を体現するもの。

残念ながら、生きる神の威光は、二度も魔王に屈服した。一度目は魔王キルシュの軍隊に。二度目は魔王ギオの男根に。

今のイデイスは、ギオに神の顕現を見ている。

エリソス神殿を解放するときにギオが放った驚異の大魔法をまのあたりにすれば、神だと思っても不思議はない、とアリサも思う。

イデイスは四つん這いで身体をまわし、もう一度、尻を女王へ向ける。当の女王は、魔王に貫かれたままだ。

「ギオ様、アリサ陛下、どうぞ」

巫女長の引きしまった尻が、高く掲げられる。ギオが女王の身体を前へ押し出すと、アリサは自分から右手で亀頭の狙いを定めた。

「あっせん、イデイス狙下、失礼させていただきます」

イデイスが両手を自分の尻にまわし、自らの女性器の帳を開いた。巫女が処女である必

要はないが、淫靡な遊戯とは無縁のはずの神聖なる秘宝が、女王と魔王へ差し出された。

アリサは異常すぎる状況に困惑しながらも、亀頭を巫女を中心へと挿入する。途端に強烈な締めつけに襲われて、声が出てしまう。

「きついわ!」

オリヴィアの余裕を感じさせる包容力のある圧力ではなく、ただひたすらにきゅうきゅうと女肉が押し寄せてくる。経験の少ない若さの力だ。

亀頭だけが入ったまま、アリサは若い抵抗にあつて、進めなくなる。だが後ろからギオの男根に押された。

「そら、もつと男らしい力を出せ」

「はひいつ!」

圧倒的な力が加えられ、アリサは強引に亀頭で濡肉のトンネルを掘り崩して進行するしかなくなる。

「きつい! あっんんん、イデイス猥下の中がきつくて、気持ちよくて、おおお、たまらなひいつ! ギオ様に突かれて、おかしくなりますっ!」

「あひゅうう、アリサ陛下のモノが、わたしを崩落させますう!」

「どうだ、女王陛下。女と男の快楽を同時に堪能する気分は?」

「はっうんん、最高! さいこうですうううっ!」



女王と巫女長と魔王の言葉がからみ合い、融合する。男女の間に挟まれるアリサの言葉は、トロトロと溶けて、甘ったるい音色に変異した。崩れた歌のような、酔った小鳥の鳴き声のような、妖しい響きが客室に充滿して、聞いている他の女たちをも酩酊させる。

「ああああ、出ますっ！ ギオ様、もう、わたくしの精液を出しまあすううう！」

「俺が先に女王陛下へたっぷりとそそぎこんでやる！」

女の中の誰かが、嫉妬混じりの声をあげる。

「まあ、ギオ様、速い！」

魔王は笑い顔で、声にしたほうをにらんでやる。

「失敬だぞ。いつも自然に任せているが、勇者は射精を完璧に制御できるんだ。今回は女王陛下に合わせて出してやるからな！」

宣言すると同時に、アリサの膣の奥で盛大な白い爆発が起こされた。連鎖反応でアリサの精液がイデイスへ向かって送り出される。

「ギオ様に出されながら、イデイス陛下に出していますうっ！ 信じられなひいっ！ イクッ！ 女のも、男のも、イッチャううううッ！」

女の絶頂と男の頂点がひとつに融合して、さらなる次元へと昇華していく。

「最高にイックううううう————ッッ!!」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元的なヒロインは、美満の方に入ってください。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

電子書籍も配信中!

業界唯一「ヒロインペ&ヒロミン」満載!!



魔法、催眠、性転換、不思議Hコミック誌!

大人気PCゲームのコミック多数連載!



詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、ダウンロードサイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

あとみつく文庫
**魔王さま、
異世界で勇者となる**
【電子書籍版】

著 者
羽沢向一

装 丁
梅田 愛

発 行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコビル1F
●編集部 TEL.03-3551-6147 / FAX.03-3551-6146
●販売部 TEL.03-3555-3431 / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©Koichi Hazawa 2015
当ファイルは、あとみつく文庫「魔王さま、異世界で勇者となる」
(2015年7月10日 初版発行)に基づいて作成しております。

<http://ktcom.jp/>

本作品のご意見、ご感想をお待ちしております

本作品のご感想、ご意見、読んでみたいお話、シチュエーションなど
どしどしお書きください! 読者の皆様の声を参考にさせていただきたいと思えます。
手紙・ハガキの場合は裏面に作品タイトルを明記の上、お寄せください。

◎アンケートフォーム◎ **<http://ktcom.jp/goiken/>**

◎手紙・ハガキの宛先◎
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコビル
(株)キルタイムコミュニケーション あとみつく文庫感想係

